

カナダ経済の現況

カナダ経済の

回顧と展望

一九七〇年代のカナダ経済は、西側先進諸国の中ではかなり高い実績をあげた。これはとくに国民総生産（GNP）の伸び、雇用創出、インフレ抑制、輸出の増大などによく現われている。だがカナダも、他国と同様に、重大な経済問題に直面しており、今年には経済成長が鈍化、インフレもある程度高進し、失業圧力が増すものと見られている。

しかしカナダの豊かな資源、投資機会、競争力再建などを考えあわせると、一九八〇年代のカナダは世界水準よりかなり高い成長を見込むことができよう。

豊かで巨大な国

一九七九年におけるカナダの国民一人当りGNPは、経済協力開発機構（OECD）加盟二十四か国中、第十一位であった。米国は九位、日本は十三位である。同年のカナダのGNPは、欧州共同体（EC）九か国の平均とくらべても、ある程度高い。

国土の大きさという点では、カナダと並びうるのはソ連だけである。カナダは

先進工業国の中では一番大きな国だし、世界全体で見てもソ連に次いで大きい。東西の幅が五千キロを超え、九百九十二万二千三百三十平方キロという面積をもつ。それだけに非常に快適な五大湖近辺や太平洋岸、肥沃な大平原地方、険しい山岳地帯、湖沼が点在する湿地帯、そして北部の未開の原野と北極のツンドラ地帯……と気候もさまざまだ。北の国といわれるカナダだが、その最南端は米国カリフォルニア州北部と同じ緯度にあると聞いて、意外に思う人も多いだろう。

七〇年代の実績

一九六九—七九年のカナダのGNP平均成長率は四・二パーセントで、OECDに加盟しているヨーロッパ諸国の平均三・二パーセントよりかなり高い。米国はわずか二・九パーセントにとどまった。この十年間に先進工業国の中でカナダを上回ったのは、日本だけである。インフレとのたたかきもまず成功した部類に入る。一九七〇—七九年のカナダにおける消費者物価上昇率は、年七・四パーセント。これは、OECD主要七か国の年平均八・〇パーセント、全加盟二十四か国の八・四パーセントより低い。日本の消費者物価指数は過去二年間は四パーセント弱と低かったが、七〇年代を

主要先進諸国の経済指標比較(%)

	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979 ⁽¹⁾	1970-79平均	1980(予測)
●実質GNP/GDP成長率(前年比)												
カナダ	2.5	6.9	6.1	7.5	3.6	1.2	5.4	2.4	3.4	2.9	4.2	0.25
日本	-0.3	3.0	5.7	5.5	-1.4	-1.3	5.9	5.3	4.4	2.3	2.9	-1
フランス	11.8	5.2	9.4	9.9	-0.3	0.2	6.5	5.4	6.0	6.1	6.1	5.5
西ドイツ	5.7	5.4	5.9	5.4	3.2	0.2	4.9	2.8	3.3	3.4	4.0	2
イタリア	5.9	3.4	3.6	4.9	0.3	-1.8	5.3	3.5	4.3	4.4	3.3	2
英国	5.0	1.6	3.1	6.9	4.2	4.7	5.9	2.0	2.6	4.5	4.1	3.5
合計	2.3	2.8	2.4	8.0	-1.5	-1.0	3.7	1.3	3.3	3.3	1.9	-2.25
OECD全体	3.1	3.8	5.6	6.3	-0.1	-0.5	5.4	4.0	4.2	3.4	3.4	
●失業率(前年比)												
カナダ	5.7	6.2	6.2	5.5	5.3	6.9	7.1	8.1	8.4	7.5	6.7	
日本	5.0	6.0	5.6	4.9	5.6	8.5	7.7	7.0	6.0	5.8	6.2	
フランス	1.2	1.2	1.4	1.3	1.4	1.9	2.0	2.0	2.2	2.1	1.7	
西ドイツ	0.6	0.7	0.9	1.0	2.2	4.1	4.4	4.9	5.2	5.9	3.8	
イタリア	2.4	5.4	6.3	6.3	5.3	5.8	6.6	7.1	7.2	7.8	6.3	
英国	5.2	2.9	3.2	2.3	2.1	3.4	5.1	5.5	5.5	5.3	3.8	
合計	3.1	3.6	3.7	3.3	3.6	5.4	5.4	5.3	5.0	5.1	4.4	
OECD全体	3.0	3.5	3.6	3.2	3.5	5.2	5.3	5.3	5.1	5.1	4.3	
●消費者物価指数(前年比)												
カナダ	3.3	2.9	4.8	7.6	10.9	10.8	7.5	8.0	8.9	9.1	7.4	
日本	5.9	4.2	3.3	6.2	11.0	9.1	5.7	6.5	7.7	11.3	7.1	
フランス	7.7	6.1	4.5	11.8	24.5	11.8	9.3	8.0	3.8	3.6	9.1	
西ドイツ	3.1	5.5	6.2	7.4	13.7	11.7	9.6	9.4	9.1	10.7	8.8	
イタリア	5.3	5.4	5.5	6.9	7.0	5.9	4.5	3.7	2.7	4.1	5.0	
英国	4.8	5.0	5.7	10.8	19.1	17.0	16.8	18.4	12.1	14.8	12.5	
合計	6.3	9.4	7.1	9.3	16.0	24.2	16.5	15.9	8.3	13.4	12.6	
OECD全体	5.6	5.0	4.4	7.6	13.3	10.9	7.9	8.0	7.0	10.5	8.0	
OECD全体	5.6	5.3	4.7	7.8	13.2	11.4	8.5	9.1	8.3	10.0	8.4	

(1)カナダと米国を除いて、OECDの推定

OECD Economic Outlook (1979年12月)

通してみると平均九・一パーセントと高い。

特に著しい伸びを示したのは、労働力と雇用であった。一九六九—七九年の間に、カナダの労働力は年平均三・二パーセントの割合で伸び続けた。これはOECD主要国のいずれをもはるかに上回る数字である。雇用の伸びの方は、年平均約三パーセントだった。それに対して、同時期の西独、イタリア、日本、英国などは、マイナスあるいはわずかの伸びにとどまっている。

カナダの失業率は、現在七パーセントを超える。人口増加率、労働力増加率の落着いた国から見ると、非常に高く思われるかもしれないが、カナダの場合、この背後には女性の労働参加と若年労働力の急増という特殊事情がある。したがって雇用の創出が高い水準で伸びたにもかかわらず、失業率の減少をもたらすまでには至らなかった。面白いことに、カナダの労働年齢人口全体のうち実際に雇用されている者の割合を示す「就業率」が、現在ほど高くなったことはこれまで一度もない。

強い輸出力

一九七九年に、カナダは四十億ドルという空前の貿易黒字を記録した。カナダは伝統的に対外貿易依存度の大きい国である。七九年の貿易総額（輸出入を合計したもの）は千二百五十億ドルをこえた。貿易総額だけでなく、国民一人当りの額でも、カナダは世界有数の貿易国で